

【総括討論】

櫻井里穂（広島大学教育開発国際協力研究センター（CICE）准教授）

基調講演者の皆様、そしてパネリストの皆様、会場の皆様も有難うございます。ありがとうございました。それでは時間も押しておりますので、引き続き総括討論に入らせていただきたいと思います。総括討論と申しましても、このフォーラムは自由な意見交換の場ということを目的にしておりますので、結論を導くものではないということをご理解いただければ幸いです。従いまして本日こちらにご登壇いただきました基調講演者、そしてパネリストの皆様が控えていらっしゃるが、少しチャレンジングなお願いでございますが、お一人2分から3分で今日のフォーラムを通して感じられたことを最後にお話しいただきたいと思います。そして会場におります学生が1分という札を出しましたら、あと1分だと思ってお話を辞めていただくような方向でお願いできれば幸いです。そうしましたら、このフォーラムから学んだと重要だと思えるポイント、それぞれの皆様にとって若干違いがあると思いますが、そちらもお話ししていただきたいと思います。皆様の右手側、黒田先生からよろしくお願いたします。

黒田一雄（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授/国際教育協力研究所所長）

どうも有難うございます。今 2015 年以降の枠組み作りについて本当に活発な意見交換、ディベートが国際社会で行われております。私もユネスコ・アジア太平洋地域教育事務局などと共に、そのような議論に2年程前から関わっております。その中で本日のお話にもありましたように、教育のアクセスと質の重要性ということが議論されています。そしてまた、本日リトル先生が仰ったように、アクセスの unfinished agenda が非常に重要であるということがあるわけです。しかしその一方、教育の内容というところをもっと考えていかなければなりません。これもすでに議論されておりますが、本日のセッションから非常に強く感じたところです。21 世紀型学力ですとか、グローバリゼーションでどのようなスキルが求められているのか、国と国との関係、もしくは国の中のコンフリクト、というところでのどのような学力が必要なのかということを考えなくてはなりません。その上で、先進国によってのみでなく、途上国の中でもそういった議論をして、2015 年以降の枠組み作り、教育の目標ということを開きかけていかなくてはいけないということを非常に強く感じたというのが一点目でございます。

それからもう一点、私が先ほどご紹介申し上げた日本の教育協力政策の中に、日本が提案する人間の安全保障というキーコンセプトがあって、その副題として開発人権平和への統合的アプローチという言葉が使われているわけですが、そこに平和が入っていることを非常に誇りに思っています。どうしても EFA の議論というのは開発と人権という二つのコンセプトをもとにして議論がずっと進んできたところがあったわけです。2000 年代をいろいろ振り返り、EFA の中でずっと忘れられてきた平和のための国際協力、国際教育協力というところを考えていくべきだと思います。それを本日、基調講演者のお二人を含め本当に多くの方々が述べてくれました。リトル先生は具体的にアクセスが低いというだけではなくて、サステナビリティ、平和ということをグローバルに考えなくてはいけないということを仰られたわけですが、そういった意味でも平和のために貢献する教育協力を行っていかなくてはいけないということをもう一度確認できたというのが二点目です。有難うございました。

フェルナンド・パラシオ（筑波大学教育開発国際協力センター研究員）

先ほども申し上げた通り、教育プロジェクトを国際協力の分野で広げていくということは、グローバリゼーションがもたらした課題に対応するためには、主要なアプローチとなります。我々は今までに見ない、拡大しつつも統合された世界に住んでおります。このため、例えばマス化しつつある高等教育においてどのように質を保つかといった新たな脅威に直面しています。国際協力によって様々なパートナーとの相乗効果を発揮することで、我々は自らの価値を高めることができ、また共に働くことで高い効果を得ることができます。

私自身の SEAMEO での経験、今では AIMS プログラムを通して、アカデミックな世界でパートナーシップを築いていくことの大切さを学び、またオープンな心で他者の言うことに耳を傾け、違いが我々を豊かにすることを受け入れることが新たなシナリオへの最善の道であるということ学びました。

我々は教育分野の国際協力を通してこそ、未来への道を開き、将来世代の文化的知性を育むことができます。そしてそこから、よりオープンで全ての人々がアクセス可能な民主的で透明性のある教育を作り上げていくことができるのです。自分のパートナーの中に自分が持っていないものを見つけることから始めることが大切です。

世界はより統合された空間となり、地域の存在が大きくなってきています。例えば、ASEAN はより身近なものとなり、教育における国際協力は人、各機関、国を結びつける橋のような役割を担っており、互いの理解と善意を育んでいます。疑いなく、この善意は全ての人々に豊かな未来をもたらすでしょう。有難うございました。

水野敬子（国際協力機構国際協力専門員/ラオス国教育省付教育政策アドバイザー）

有難うございます。私も手短にお話しします。本日、様々なセクターでいろいろな国の教育に関わる方々から、それぞれの得意な分野でグローバリゼーションに対応するための教育にどのように取り組んでいるのかお話を聞かせていただきました。違う分野で異なる切り口から教育に取り組んでいることを学ぶための大変良い機会であったと思います。分野は異なっても同じ目標に対して取り組んでいるわけですから、グローバリゼーションに向けたシナジーが促進されるよう、相互に協力し合いながら進めていくということが非常に大切だと実感しました。本日、いろんな視点からのお話を聞く機会に恵まれて、私自身にとっても非常に面白かったです。特に民間セクターがどういった形で教育に取り組んでできているのか、それをどうすればラオスに活かせるかという視点から伺っていたのですが、やはり異なる分野の人々が共通目標に向かってそれぞれの比較優位性を活かしながら前に進んでいくということが大切だと思いました。有難うございました。

アンシュール・ソナック（インテルコーポレーション アジア太平洋地域教育部長）

私の目から見ますとやはりいろいろな考え方、いろいろな疑問をしっかりと聞いて、日本は何を考えているのか、何を变えようとしているのか理解することが重要であったと思いますし、非常に大きな成果でありました。そして皆さんも教室に戻って学生のもとに戻って、同じような議論を進めていただくことができると思います。議論の場を設け、そして複数の課題を話し合っていたいただきたいと思います。2015 年以降の教育の変革に向けての新しいアプローチ、どのような教育ビジョンを描くかを考えてする必要があります。次のステップは何なのか考えた時、しっかりと議論を進めて、何が成果を出し、何が失敗に終わったのかという実例、PPP でどういうことができるのか、官民でどんな形で進めていくことができるのか、政府はうまくいっていることは何なのかということを考えることが必要だと思います。今回はこんな議論をさらに進めることができると思います。ということで、来年もまたこのような国際教育協力のフォーラムの場を期待したいと思います。

キレミ・ムウィリア（元ケニア教育省副大臣）

非常に素晴らしい会であったと思います。簡潔に要約するのは難しいですが、皆さんが仰ったように ICT 革命を利用するべきであると思います。多くの方々が仰ったことですが、ICT は教育を公平化し、非常に不利な状況下にある国でも日本やアメリカのような国と同様のスピードで学ぶ機会が得られるのです。私自身アフリカから来たものとして、ICT の民主化を進めていきたいと考えております。村落に入り、ネットワークを通して学校を繋げていくデジタルセンターを政府が設立しています。教材のデジタル化を行い、より安く全ての生徒に行き渡る教材を提供することも ICT は可能にします。そしてまた ICT は学校や機関を国際的に繋げることも可能にします。学生はそのような経験を最大限使っていくことができるわけです。

そしてまたモバイル・テクノロジーというものもあります。ケニアでは今全てが変わりつつあり、モバイル・テクノロジーがビジネスに、コミュニケーションに、バンキングにさえ使用されています。アフリカ、あるいはその他の国でも同じことですが、そういったテクノロジーを利用する必要があると思います。政府はその点については投資をする必要があります。政府というのは私たちすべてを意味しています。政府は資源を確保し、そしてそれを僻地まで届けることができるようにしなくてははいけないし、かつ ICT 分野で働くサイエンティストのサポ

ートも必要です。またコミュニティや両親がそのようなテクノロジーに関心を持つことも重要です。日本やアメリカの子供たちというのは非常に ICT 使用に長けていますが、それは両親が投資をし、サポートをしているからです。政府や学校等の機関だけではなく両親の投資が必要です。

それから、大学は変化しなくてははいけません。大学はこの ICT 革命を活かし、またシリコンバレーの例などから学んでいく必要があるということです。10 万ドルとはいわず、もっと小さな金額でもよいのでスタートアップ企業を支える、才能のある学生に対して支援し、ベンチャー企業を進めていく、そうすれば国際社会がやがてパートナーとなりこのようなイニシアティブをサポートしてくれるようになるでしょう。最後に、次に何をするのかということです。今回様々なお話しが出てきましたけれども、これをどのように幅広いオーディエンスに伝えていくのか、これから何年もたった後にこの会議の成果が生まれてくると信じたいと思います。

アンジェラ・W・リトル (ロンドン大学教育研究所 (IOE) 名誉教授)

ありがとうございます。もしかすると不公平に聞こえるかもしれませんが私は少し多めにお話しする時間を与えられています。ですから 2 分を超過してもどうか私が、時間をオーバーしていると思わないでください。10 分程お話ししていいと伺っているため、少し長く話しますが 10 分は話しません。

とても素晴らしい日でした。講演者、パネリストの皆さん、本当に時間をしっかり使ってアイデアを共有してくださいました。そしてこの運営委員会の皆さんに心から感謝申し上げたいと思います。今回のフォーラムでは、たっぷり時間をいただいてお話をすることができ、とてもよかったです。本当に寛大な時間の配分をしてくださって有難うございました。今日も非常に実り多いものがあったと思います。

一つ私の方から気が付いたことを話します。皆さん聴衆がペアや小さなグループ間でアイデアを共有する時間が十分になかったのではないかと思います。私は元教師ですから、皆さんに活発に議論に参加していただきかけたかったです。いわゆるバズセッション、例えば講演後に皆さんの中でいろいろ話をしていただき、講演に関する感想をシェアする場があってもよかったですのではないかと思います。そうすることで本フォーラムはより興味をそそるものになったかと思えます。これは教育学的観点から見た助言です。この運営法はもしかすると来年の国際教育協力フォーラムで適用されるのではないかと思います。

本日はグローバル化とテクノロジーにより子供たちに、人々に、世界にどのような状況が起こるのかということをお話された講師の方々がいらっしゃいました。それからまた、グローバル化によって教育制度に対しても、家族に対しても、子供を持つ人にとってもいろんな課題が出てくるというお話もいろいろな方からありました。それからまた、成長があまりにも急激に進められすぎて、格差が高まるという話もありました。これは驚くべきことではないかもしれませんが、新しい技術が入ってくると学校でも様々な機関でもプラスに対応できる場所があって、取り入れて実施できる場所が先に行ってしまう、そうすると取り残されたところとの格差が出てしまいます。よって都市と農村、良い先生がいるかどうかによって格差が出てくることも驚くことではありません。でもそれを忘れないようにすることが重要です。企業の社会的責任 CSR という言葉がよく言われたりしますが、やはり一番下にいる人たちに対してはキャッチアップするチャンスが必ずあるようにすることが大切です。例えば代償的な政策をとってこの不利な立場にいる人がキャッチアップできるようにする、ということも重要でしょう。隆子さんのご質問にありましたが、ICT のあり方、そして都市と農村の格差の縮小のために、ということでその視点からのご質問、非常に的を射ていると思います。いくつか答えがありうるかもしれませんが、まず一つ、新しい技術のコスト、代償ということを考えることも有用ではないでしょうか。新技術のコストというのはやがて下がっていくものです。私の意見は保守的過ぎると言われるかもしれませんが、ただちょっと心配するところもあります。確かに民間の企業などが ICT や教育に関心を持ってくれるのはとても良いことだと思います。例えば ICT の教育における価値を促進する、それはとても良いことだと思います。例えば講演者の皆さんの本日のお話、とても説得力がありましたよね。皆さんは素晴らしい教育者だと思います。私は皆さんの洗練された教授法、聴衆と交流の仕方に感銘を受けました。プロフェッショナルな教育者と呼ばれる人たちよりも素晴らしかったと思います。しかし、大企業に関心を持っている理由は、究極的には利益ということをお忘れはいけません。ただ、企業の社会的責任、あるいはフィランソロピーという概念がもてはやされている中で、やはり厳しく疑問を投げかけることも重要じゃないでしょうか。成果はどうなのでしょうかと。技術のコストを下

げて大衆がアクセスできるようにするという意味で成果はどのようなのでしょうか、とやはり厳しく問うことも必要だとは思っています。

それからまた 2015 年と 2016 年の間で何か抜本的に突然変わるわけじゃない。教育業界では、教員は、忍耐強くこれまでやってきたことを引き続き行う必要があります。教育というのは流行ものでコロコロ変わっているものではないのです。やはりアクセスの確保、それから質の向上という基礎教育の unfinished agenda があるのです。それから高等教育や技術訓練校への支援も国際的なアジェンダとして挙がってきております。しかし国際的なアジェンダがすべてではないということを認識しておかなくてははいけません。国際的なアジェンダというのはとてもパワフルで、特に国際機関の予算分配等の決定要因にもなります。でもそれは偏ったアジェンダである可能性もあるということを忘れてはなりません。すなわち、全ての国には、各国の政府によって決められた、技術職業教育政策、高等教育政策等があるのです。万人のための教育で良かった点は、各国が高等教育、中高等学校以降の教育を過度に重視していることを把握していたことです。こういった部分は多くの国家予算がかかりますが、万人の教育という意味で予算の偏りがないようにしなければなりません。しかし、同時に基礎教育だけでは困ってしまいます。教育のアジェンダ、特に教育資金調達には国際社会に偏るのではなく、複眼的に考えることを忘れないでほしいと思います。

21 世紀型スキルに関する質問ですが、レヴィとマーネイン (Levy and Murnane) の近況の説得力、影響力のある研究結果を載せたスライドが登場したかと思えます。それは定型手仕事 (routine manual skills) と非定型手仕事 (non-routine manual skills) などにとって代わり、非定型分析的業務 (non-routine analytic skills) そして否定形型対話能力 (non-routine interactive skills) が求められるようになってきたことが研究してわかったというものでした。この研究はアメリカの経済社会を基に行われたものですが、私はあのグラフをいろんなところで実は見ました。世界銀行のある国を対象とした文書でも見ました。勿論興味深いと思います。しかし、アメリカの研究、アメリカの予測が世界の国すべてに本当に当てはまるのでしょうか。世界には 200 以上の国があるのです。あの特定の唯一のあのグラフ、あれが例えばケニアで今後 20 年間必要なことのすべてなのか。あれがラオスで今後 20 年間圧倒的に重要なものに本当になるのか。ラオスはやはり今でも農業中心の社会なわけですから、いろんなこういったメッセージがありますが、ある特定の文脈に起因していることがあるため少し慎重になってほしいと思うのです。特定の文脈の抽象的なメッセージを新たな文脈に取り入れる際は注意していただきたいのです。この研究が様々な国の文脈で何度も繰り返し行われた結果を見てみたいと思います。それからまた特に JICA は国際協力、関係等の研究を行っており、とても影響力のある、興味深い研究もいろいろ示されましたけれども、世界にはあらゆるケースがあつて一つではない。これは重要な課題であります。そしていろんな博士論文の研究などもこの分野では沢山あると思うので注目したいと思います。それから少なくとも 2 名の講演者が世界の中で人材が非常に無駄になっているという点を挙げていたかと思えます。人材、特定のスキル保持者が足りないということが起こっていると同時に大量の人材、才能が無駄になっている現状があるということも考えなければいけないと思います。

パネリストの今日午後のお話を伺いまして、もう一つ感じたことがあります。これはもうちょっと深く掘り下げる価値があるなと思ったことは、逆転学習というお話です。JICA の方が先ほどお話されていた、他国の先生に日本で教えてもらったかどうか、日本の先生も例えばケニアの学校に行つてケニアの先生と一緒に二人で並んだりして教えたかどうかという提案には刺激を受けました。誰が誰に何を教えるのか、そして誰が誰から学ぶのか、これを問いただしてもいいと思うのです。ソナック先生の、3 歳半の子供がドラえもんから日本の文化をどれ程学んだのかというお話はとても良い例だと思います。指導と学習といったことを考える時、年下の者から年上の者が教わるということがもっとあつてもよいのではないかと思います。今はそれが十分になされておられません。これこそがまさしく、若い才能を無駄にしているということだと思います。沢山の国が高齢化社会を迎えています。日本は高齢化社会の代表例です。技術はどんどん進み、高齢者はついてくのがとても大変です。ですから、高齢者はすなわちこういう技術、特に ICT を若者から学ぶチャンスが必要となります。ICT だけに限らず、例えばロボットについてもそうでしょう。高齢者の生活支援として、ロボットの役割が今後高まるでしょう。介護がロボットにとって代わることが段々増えるかもしれない。でも 85 歳になって私がロボットに助けをもらえるというよりは、若い人にも来てもらつてロボットの使い方、それからまたロボットのスイッチの切り方、そう

いうことを若い人から私は教えてもらわなければいけないのです。それもやはり今までとは全く違う学習と教授という意味でのこれまでになかった課題です。今までと逆方向の教授すなわち、大人が子供から教わる、教員が生徒から学ぶ、生徒が例えば ICT 等の技術を苦手とする教員にスキルを教えるということが必要になってくるのです。

それから最後ですけれども、この持続可能な開発のための教育(ESD)ということについて、日本に来る前までは、持続可能な開発のための教育が国際協力の中でこれだけ重視されていて、日本でこれだけ教育開発の中で重視されているということを私は知りませんでした。そこで私がお聞きしたいことは、ESD プログラムのインパクトに関する評価研究がどれだけ行われているかということでした。特に、長期的に持続可能な開発のための教育が将来の学習教授実践にどれだけ役立つのかということに私はとても感心があります。私は教育者であり、教授方法が教授内容よりも子供の思考過程に大きな影響を与えることを知っております。私は、紛争解決、平和のための教育、民主主義のための教育というプログラムが教室の中で実施されているのを見てきました。例えば民主主義のための教育というのを見てきましたが、それは権威主義的な先生によって教えられていました。そのような状況下で生徒は何を学べるのかと考えてしまいます。ですから、ESD や紛争解決のための教育の内容を考える時、どのような実践方法で教員がそういう科目を教えるのかを批判的に問いかける必要があるでしょう。言い回しにもあるように価値観とは教わるものではなくて、自分で経験して育むものです。学校や教室の中で持続可能な開発が本当に実践され得るのか、持続可能な開発に関する教育を実施している学校から他の学校は学ぶことができるのかと問われる必要があると思います。有難うございました。

櫻井里穂（広島大学教育開発国際協力研究センター（CICE）准教授）

リトル先生、非常に総括的にまとめていただきどうも有難うございました。リトル先生が本日の討議に出てきました重要な点をまとめてくださいましたので、本日司会進行役の私のほうからは、今回このフォーラムを通して、改めて感じました点を一点だけ共有させていただきたいと思います。

今回のフォーラムにありましたグローバリゼーションという言葉は、元々はインターネットなどの通信技術の発展とともに、人・カネ・モノなどの経済の領域を中心に世界規模の構造的変容を意味する現象であるというふうにされております。これに対しまして、創造の共同体 (Imagined Communities)、有名な本でございますが、政治学者の Benedict Anderson 氏は少し別の、経済は万能ではないという見解を示しております。グローバリゼーションとうまく付き合うために必要なこと、それを彼は 2005 年日本の私立大学での講演において、「貿易よりも言語」を、と表現を致しました。このようなカネ・モノの繋がりを中心とする現在のグローバリズムに対しまして、人間的な繋がり、すなわち、異文化に対する感受性を養い、言語理解などを通して他者理解に励むことこそ大切である、という様に申し上げました。換言すれば、生きた人間同士の繋がりこそがこうしたグローバル時代に必要であると、述べております。

2015 年を来年に控えた今、今後の教育協力のあり方を巡っては議論が尽きませんが、様々な形、インターネットなどを通して、他者との出会いが可能である今、このような視点を心のどこかに持つことも必要なのかもしれません。

冒頭で申し上げましたが、このフォーラムは結論を見出すことを目的としておりません。本日のフォーラムが参加者の皆様一人一人に何かしらの示唆を提供することができることがありましたら、主催者の一団体として大変幸甚に思います。それでは時間になりました。

ムウィリア先生、リトル先生、黒田先生、パラシオ先生、水野先生、ソナック先生に感謝の気持ちを込めまして今一度大きな拍手をお願いいたします。どうも有難うございました。

以上を持ちまして第 11 回国際教育協力日本フォーラムのプログラムがすべて終了いたしました。主催団体に代わりまして、基調講演者、パネリストの皆様、そして最後まで熱心に議論を盛り上げてくださいました会場の皆様に心より感謝を申し上げます。どうも有難うございました。またこのフォーラムを後援いただきました国際協力機構と九州大学、そして素晴らしい通訳をしていただいた通訳の方々にもお礼申し上げます。有難うございました。最後に事務局の準備を数か月にわたり手伝ってくださいました事務局の裏方の皆様、そしてインターンの皆様、学生の皆様もどうも有難うございました。